考古学者　横山将三郎

荒　木　亮　子

はじめに

愛知大学綜合郷土研究所には多くの考古遺物が保管されている。そのなかには、本学教授横山将三郎が調査したこの地域の遺物が多く含まれている。

横山は、設立当初からの愛知大学の教員である。倫理学の教員として赴任したが、実は考古学者という別の顔も持っていた。しかし、設立したばかりの愛知大学には文学部もない、ましてや史学科もない、綜合郷土研究所（以後、郷土研と呼ぶ）もない、もっと言えば考古学の授業１コマさえなかった。そのようなところに、横山は自らの意思で、「考古学」の種を蒔いた。その種はある時期「考古学といえば愛知大学」とまで言われるほどに育った。

これまで、横山についてまとめられたものはない。大学史でもほとんど取上げられてこなかった。筆者はこの数年間郷土研の考古遺物を整理してきたことから、このような状況を残念に感じていた。ならば自分自身でと思い本稿を執筆することにした。郷土研にはほとんど資料が残っていないため、詳しいことは分からなかったが、新聞記事や出身校の資料・論文などから簡単な経歴を追うことができたので、ここに紹介し、その業績を顕彰したい。

１、考古学との出会い

三重県松阪市出身で、明治30年（1897）10月10日に生まれた。自宅は松阪の城下町にあり、国学者本居宣長の居宅「鈴屋」から歩いて２分のところにある[1]。松阪第一尋常高等小学校に通った子供時代には、町をあげて宣長翁百年祭が行なわれており、宣長や学問を身近に感じながら育ったことは想像に難くない。いまさら筆者が説明することではないが、宣長は医者を生業とし、家族を養いながら、国学の研究に励み、大成した人物である。本業とは別の学問に打ち込んだ宣長の姿は、倫理学の教員として生計をたてながら、考古学研究に邁進した横山と重ね合わせることができる。

三重県立第四中学校（現在の宇治山田高等学校）を卒業後、大正５年（1916）岡山県にある第六高等学校に進学した[2]。考古学に出会ったのはこの頃だった。「岡山地方には史蹟がたくさんあり、高等学校時代には友人と発掘にでかけた」と語っている[3]。

第六高等学校を卒業後[4]、大正８年（1919）に東京帝国大学文学部に入学[5]。倫理学を専攻する一方、考古学の講義も受け、発掘調査に参加した。横山の経歴書には、在学中に鳥居龍蔵と大山柏から考古学を学んだことが記されている[6]。

2、京城帝国大学時代

東京帝国大学卒業後、同大大学院に進み[7]、大正13年（1924）に京城帝国大学開設とともに同校の予科教授となった。京城帝国大学では、修身・哲学概説などの授業のほかに、クラス主任や学生監などの仕事も持った[8]。一方、考古学にも情熱を注ぎ、仕事の合間をぬって京城近郊の遺跡を丹念にまわった。特に、石器時代の遺跡に関心を持っていた。

この頃の横山について詳しく述べた文章がある。書いたのは、朝鮮総督府博物館に勤務し、戦後も韓国の国立博物館設立に尽くした有光教一である。著作「私の朝鮮考古学」で横山について触れている[9]。少し長いが横山が朝鮮で行なった調査や業績について分かりやすくまとめられているので、そのまま引用する。

> 京城大学予科で哲学を講義しておられた横山将三郎教授は戦前の朝鮮考古学界を代表する研究者の一人でもあった。戦後初めて教授が私を訪ねて博物館事務所に来られたのは十月二十二日(月)であった。教授は、過去二十年にわたって蒐集した遺物―ほとんどが石器時代の土器や石器―を関係の写真や記録とともに一括国立博物館に寄贈すると申し出られ、明日にでも受け取りに来てほしいと要請された。（中略）翌二十三日朝、私は米兵運転のトラックに乗って横山教授宅に行ったが、蒐集品の量は予想を遥かに超えて多く、借用時間が十一時三十分までのトラックでは半分も運び切れなかった。次の日（二十四日）は午后再びトラックで横山教授宅に着き、屋根裏の部分に堆く格納された蒐集品を運び出したが、完形土器も含めてトラックの荷台一杯になった。軍用トラック二台に満載の石器時代遺物の分量は、それまで総督府博物館に集まっていた石器時代遺物の総量を優に凌ぎ、より多くの貴重な資料を含んでいた。(中略)総督府の機構内では、地味な石器時代遺跡の学術的発掘調査を行なうことが困難であった。一九一〇年代の鳥居龍蔵委員による先駆者的調査以後、日本敗退までの間に、朝鮮において本格的に発掘調査された石器時代遺跡としては、一九二九～一九三一年の咸鏡北道雄基貝塚のほかは、一九三〇年の釜山東三洞貝塚、一九三三年の咸鏡北道鐘城郡油坂貝塚および元帥台貝塚をあげえるにすぎない。
>
> 横山教授が、そのうちの東三洞貝塚と油坂貝塚および元帥台貝塚の発掘調査を全く個人的に行ない、詳しい学術的報告を発表して朝鮮石器時代文化の研究に大きな貢献をされたことは学史に明白である。今回寄贈の横山コレクションのなかには、これら公表ずみの遺物も含まれているが、ほかに京城近郊の出土品が多量に入っていたので驚嘆した。すなわち横山教授は、自宅から日帰りで往復できる遺跡を克明に踏査されたと思われる。なかで最も注目すべきは、一九二五年の大出水で俄かに露出した漢江左岸の岩寺里遺跡の出土品である。横山教授自身も「採集した石器、土器等は自動車で幾度も運搬しなければならぬほどの量であった」と回顧された。たしかにそれまで総督府博物館に集まっていた岩寺里遺跡の土器や石器の分量を遙かに越えるほどであった。
>
> 朝鮮には他にこれほど土器や石器を集めたものはいなかったから、横山コレクションを加えた国立博物館は、朝鮮石器時代の学術的資料を独占した観があった。時局の変革に際会したためとは言え、横山教授が長年にわたる発掘調査の成果を一括して国立博物館という公的機

関に潔く寄贈されたことに深い感銘を覚えた。

このとき横山が寄贈した資料は、現在でも韓国の国立中央博物館に保管され、インターネットで一部が公開されている。

3、愛知大学時代

愛知大学教授に着任　昭和21年（1946）5月、愛知大学設立に向けて動き始めていた大学設立事務所は、東亜同文書院大学をはじめ、京城帝国大学などの教授に対し愛知大学着任を要請していた。帰国していた横山にも要請があった。7月22日に作成された予科教員組織の原案には、哲学概論・心理・倫理の教授として横山の名前が挙がっている。同年11月15日付で愛知大学の設立が認められ、11月30日には横山に予科教授の辞令が出された[10]。51歳であった。こうして、愛知大学の教員の一人として学生の受入れ準備にとりかかることになった。

12月8日から予科の転入学試験が行なわれ、明けて昭和22年（1947）1月に予科の授業が開講。横山の愛知大学での講義がはじまった。当初は予科で哲学・倫理学だけを担当したようである。翌年からは法経学部で考古学の授業も担当した[11]。その後は新制大学設立や大学の改変に伴い、短大部、文学部、教養部において、哲学・倫理とともに考古学の授業を兼任した。

愛知大学考古学会設立　話を愛知大学開講の年にもどす。昭和22年（1947）1月になんとか開講したものの、ひどい食糧難で、学生も大学も貧しく、物的環境はきわめて劣悪で困難な時代であった。他方、学問への情熱は皆高く、教員はきびしい教育をし、学生は熱心に勉強した[12]。

このような状況のなか、同年10月、横山は「愛知大学考古学会」を設立した。この時、横山は新聞記者の取材に対し「従来考古学が趣味的に扱われ、コレクション中心であった点を除いて、学術的に郷土を研究したい」と答えている[13]。そして翌月には瓜郷遺跡調査会による瓜郷遺跡の発掘へ設立したばかりの同会を率いて参加するなどさっそく活動を開始した。

坊入遺跡の発掘　昭和24年（1949）6月、横山のもとに豊川市立西部中学校の教員から、校庭から土器が出土したとの話が持ち込まれ、横山が発掘調査を行なうことになった。この坊入遺跡[14]の発掘が、「愛知大学教授」横山将三郎が担当した最初の発掘調査である。

この当時、横山から考古学を学び、坊入遺跡発掘にも参加していた戸谷茂信氏は当時のようすを「教授、Y君そして私はよく表面採集と称して数人で野山を駆け巡った。渥美半島の先端の恋路ヶ浜、石巻山、嵩山あたりまでの小高い山野や田畑を調査に歩いた。」「食糧難の時代で、食べ盛りの学生たちはいつも飢えていた。八町の自宅（横山の自宅：筆者補註）へ度々お伺いして晩御飯をご馳走になりにいった。飯はない時代で、饂飩が多かった。」と回顧している[15]。

縄文晩期の住居跡発見
愛大郷土研究所　横山教授らの発掘隊
町田区　原合雁

雁合遺跡の発掘を報じる新聞記事
（昭和29年6月17日付　中部日本新聞）

渥美半島の遺跡調査　昭和25年（1950）5月に綜合郷土研究室（翌年6月研究所となる）が開設されると[16]、翌年には「渥美半島における沿海村の総合的調査研究」がはじまり、社会学・考古学・人文地理学・生物学・経済学など多岐にわたる方面から調査が行なわれた。横山は「渥美半島に於ける古蹟・史前遺蹟の調査研究」を担当した。昭和26年（1951）～昭和29年（1954）まではその調査の一環で地部道1号墳・向山5号墳・宮西遺跡[17]・雁合遺跡・籠田遺跡などの現在の田原市域の遺跡調査を行なった。

このうち、宮西遺跡の研究成果については、昭和28年（1953）に京都大学で開催された日本考古学会で発表し、注目を浴びた。

綜合郷土研究所所長に就任　昭和29年（1954）10月に綜合郷土研究所の所長を務めていた秋葉隆が急逝。横山がその跡を引き継いだ。それまでの綜合研究体制が維持困難となったため、横山はあらたに考古班・歴史班・社会学班の三班をもって新体制とし、各班は緊密な協力関係を保ちつつ、それぞれ独自の研究課題を追求することになった。

豊橋市天伯原周辺遺跡の調査　横山は豊橋市の天伯原周辺の遺跡発掘に取り組みはじめた。昭和30年（1955）に野依町の仏餉遺跡を発掘、住居址を検出した。翌昭和31年（1956）には南高田遺跡など天伯原周辺の遺跡の調査に取り組んだ。何度も天伯原に足を運んでいたようだ[18]。

この年は、愛知大学に史学科がつくられた年である。それにより北海道大学から歌川學が赴任。横山はよき後継者を得ることになる。そして横山は「考古学を講じて史学科生の手を取り」[19]、文献史学を学んでいる学生に考古学の面から歴史学へアプローチする意義や術を伝えた。

宝飯郡一宮村の古墳調査　「一宮村には沢山の遺跡があり、幾多の考古学者が来られて研究せられましたが、どうもまとまつた線が出ていないので、郷土誌を作つてみたいと思う私は常に不満を感じていました。そこで横山教授の考古学を導入せようとの村の世論もあり、旁々先生の御骨折りを御願することになった。」[20]という教養部教授浅若晁の言葉にあるように、昭和32年（1957）以降は一宮村を舞台に発掘調査を行なうようになった。一宮村在住の浅若が大学の同僚である横山をひっぱったということだろう。浅若自身も発掘現場に足を運び、横山とともに一宮村の古墳の調査を行なった[21]。

（火曜日）　中部日本新聞

多数の土器発見

一宮村　古代人の遺跡にメス

愛大綜合郷土研究所

発掘作業にあたる愛大考古学研究会の一行

炭焼平古墳群発掘を報じる新聞記事
（中部日本新聞　昭和32年7月23日付）

昭和32年（1957）夏に炭焼平27・28・29号墳の発掘を実施し[22]、翌昭和33年（1958）6月に東原4･5･6号墳[23]を調査した。

古墳の移築　その年の夏休みには東原5号墳･6号墳の2基を愛知大学構内の哲学の森へ移築をした[24]。3年前に導入されたばかりの大学のスクールバスに、古墳の石を積み込み、運んだ様子が写真に残っている。哲学の森の中のこんもりと盛り上がったマウンドがそれである。現在は笹が生えてしまい、マウンドの形状も変わってしまい、移築された石室の様子が覗えないのが残念である。

このような一宮村での横山の活躍を耳にした住民のなかには、自身が所持する出土品を郷土研に寄贈する者も現れた。それが、徳台遺跡の遺物である。

石室の石材を菰に包む

石材でいっぱいのスクールバス

東原５・６号墳移築のようす
（写真は郷土研所蔵）

遺物の寄贈に触発された横山は、同年秋にそれらが出土した地点の発掘調査をおこなった。

最後の調査　翌昭和34年（1959）1月、一宮村の古墳調査[25]に出かけた横山は、風邪をひいて病臥した。そして胆汁性腹膜炎を併発、国立豊橋病院で療養するも、2月4日に帰らぬ人となった。享年61才であった。

横山逝去の知らせは各社新聞記事に掲載され、告別式には横山を慕っていた多くの学生が参列した[26]。また下書きの状態だった遺稿「一宮村徳台遺蹟」は、社会学の教授川越淳二と生前横山の薫陶を受けた学生らによって浄書され、まとめられた。

おわりに

「考古学的研究と云えばすぐに古墳を掘ったり貝塚をかきまわしたりするように思われているが、学問としての考古学は、そうした作業は資料を得るまでの手段で、その資料を調査し、報告して始めて学問的な役に立つのである。（中略）ただめずらしい、変ったものを発掘するのが目的ではない。（中略）報告書をまとめて出すことが学問的に云って大切なことである」と横山は書いている[27]。そしてその言葉通り、横山は発掘調査をするとその翌年には必ず報告を出した。発掘しては書き、発掘しては書き、毎年地道にそれを繰り返した。現在、横山の残したこれらの発掘報告は、この地域の歴史を紐解く上で欠かせない資料となっている。

また横山亡き後も、考古学を学ぼうという気運は愛知大学内に引き継がれ、授業とは別に自ら進んで、考古学を学ぶ学生は後を絶たなかった。そしてそれは学生だけではなかった。文献史学の歌川學にも横山考古学のDNAが引き継がれた。横山の後任として愛知大学で考古学の講義を行なっていた澄田正一（当時名古屋大学教授）・大参義一（当時名古屋大学助手）から考古学を学んだ歌川は、吉祥古墳群（豊橋市）・河原田遺跡（豊川市）・寺西１号墳（豊橋市）などの遺跡調査を史学科の学生とともに実施した。横山考古学のＤＮＡは歌川を通して学生たちに沁みこんでいったのである。

愛知大学の70年を振り返ると、卒業後、埋蔵文化財関係の仕事についた学生は多い。学問や研究に携わる史学科卒業生のほとんどが考古学関係者であるといっても言い過ぎではない。横山は当地域の文化や歴史を、考古学で解明するとともに、地域で考古学に従事する人材を、直接あるいは死後も間接的に育成したのである。

知を愛する者 philosopher に世代の交代はあっても、考古学研究は絶えることなく引き継がれたのである。

謝辞

本稿は次の方々のご協力によりまとめることができました。記して御礼申し上げます。
岩野見司氏・桒原将人氏・武井義和氏・戸谷茂信氏・藤城顕氏・古井澄子氏

註

(1) 鈴屋は明治43年に松阪城内に移築されるまで、横山の自宅と同じ魚町に所在した。

(2) 第六高等学校（1916）『第六高等学校　自大正五年至大正六年』210頁

(3) 愛知大学新聞研究室（1957）「せいしゅん　横山教授の巻」『愛知大学新聞　第88号』

(4) 第六高等学校（1920）『第六高等学校一覧　自大正八年至大正九年』213頁

(5) 東京帝国大学（1920）『東京帝国大学一覧　従大正八年至大正九年』53頁

(6) (3) と横山が書いた「経歴書」。この経歴書は野田村役場資料『村史関係綴』に綴られており、郷土研はその複製を所蔵している。
当時の東京帝国大学文学部で考古学の講義を担当していたのは原田淑人で、(3) の記事から受講したことが推察されるが、「経歴書」には鳥居と大山の名前が記されている。大きく影響を受けたのがこの二人だったのだろう。鳥居龍蔵は、大正12年（1923）から理学部人類学教室助教授であったためそこで教わったのだろうか。

(7) 東京帝国大学（1926）『東京帝国大学卒業生氏名録』240頁、東京帝国大学（1924）『東京帝国大学一覧　従大正十二年至大正十三年』学生生徒姓名の7頁

(8) 京城帝国大学『京城帝国大学予科一覧　大正十四年』76頁

(9) 有光教一（1985）「私の朝鮮考古学」『季刊三千里43号』三千里社。『朝鮮考古学七十五年』(2007) に再掲。

(10) 愛知大学（1956）『愛知大学十年史』22頁・37頁

(11) 愛知大学（2000）『愛知大学50年史』65頁、設立認可申請書には法経学部にも予科にも考古学の授業は見当たらない。しかし、昭和23年（1948）の法経学部のカリキュラムには、第2選修科目に考古学1単位を認めることができる。

(12) (10) に同じ

(13) 中部日本新聞「愛大に考古学会」 昭和22年10月7日付。横山は自身の研究室を「考古学研究室」とし、そこを拠点に活動していた。この部屋は、昭和29年12月5日におきた教室棟の火災で類焼した。この時、土器などの遺物は、展示会に出陳していたため無事であった。
　この「考古学会」については戸谷茂信氏・藤城顕氏らによると「考古学研究会」とも呼称していたようだが、本稿では、横山が報告書で使用している「考古学会」と表記した。
　なお、愛知大学には、近年まで2つの「考古学研究会」が存在した。文学部史学科の「日本史専攻会考古学部会（通称：史学科考古学研究会）」と、学生サークルの「考古学研究会」である。どちらも「考古研」とよばれていたため、混同されやすい。

(14) 当時は国府遺跡と呼称していた。

(15) 戸谷茂信「横山教授の思い出」

(16) 愛知大学綜合郷土研究所（1951）『愛知大学綜合郷土研究所所報 第一号』、愛知大学（1952）『愛知大学学報 第12号』

(17) 当初横山は、宮西遺跡を「大久保遺跡」と呼称していた。いくつかの報文で「大久保遺跡」と表記している。

(18) 愛知大学綜合郷土研究所（1957）「研究所彙報Ⅲ」『愛知大学綜合郷土研究所紀要 第3輯』

(19) 歌川學（1966）「史学科創立のころ」『史学科十年の歩み』

(20) 浅若晁（1959）「追記」『愛知大学綜合郷土研究所紀要 第5輯』

(21) 浅若は横山が亡くなったあとも、歌川とともに、西原26号墳（旧称：東才原古墳）を澄田正一の指導を受け、発掘調査を実施した。また、卒業生らとともに一宮村鑓水遺跡などの発掘調査もおこなった。

(22) 当時は「炭焼平１・２・３号墳」と呼称した。
(23) 当時は「上長山１・２・３号墳」と呼称した。
(24) 中部日本新聞「校庭に古墳を再現」昭和 33 年 8 月 28 日付
(25) 一宮村のどの古墳を調査していたかは不明。
(26) 松葉秀文（1959)「故横山教授を偲ぶ」『愛知大学新聞　第 105 号』愛知大学新聞研究室
(27) 横山将三郎（1952)「考古学とは？」『愛知大学綜合郷土研究所所報　№3』

横山将三郎著作一覧

1930 年　「京城府外鷹峰遺蹟報告」『史前学雑誌　第 2 巻第 5 号』史前学会
1931 年　「常陸考」『民俗学第 3 巻第 2 号』民俗学会
「上総国小櫃川流域に於ける石器時代遺跡に就いて」『史蹟名勝天然紀念物　第 6 集第 1 号』史蹟名勝天然紀念物保存協会
「京畿道高陽郡國祀峰の遺蹟に就いて」『史蹟名勝天然紀念物　第 6 集第 11 号』史蹟名勝天然紀念物保存協会
1932 年　「薩摩国西市来貝塚」『史蹟名勝天然記念物　第 7 集第 4 号』史蹟名勝天然紀念物保存協会
1933 年　「釜山府絶景島東三洞貝塚調査報告」『史前学雑誌　第 5 巻第 4 号』史前学会
1934 年　「油坂貝塚に就て」『小田先生頌寿記念朝鮮論集』小田先生頌寿記念会編
1939 年　「人像を彫った石斧」『ドルメン　第 5 巻第 1 号』岡書院
「朝鮮の史前土器研究」『人類学・先史学講座　特別講座1』雄山閣
1940 年　「親切（上)」『思想（3）(214)』岩波書店
「親切（下)」『思想（3）(217)』岩波書店
1942 年　「石包丁について」『古代文化　13 巻 10 号』日本古代文化学会編
「久米の子等の感激」『文献報国　8（3）(69)』朝鮮総督府図書館
1943 年　「不作為の倫理性」(『吉田博士古希祝賀記念論文集』宝文館
「古代島の民俗」『民族學研究』日本民族學協会
「朝鮮社会構造の実践的了解」『日本諸学振興委員会研究報告　第 19 篇』文部省教学局編
1949 年　「国府遺跡発掘調査報告」『愛知大学文学論叢　第 1 輯』愛知大学文学会
1952 年　「考古学とは？」『愛知大学綜合郷土研究所 所報　№3』
1953 年　「ソウル東郊外の史前遺蹟」『愛知大学文学論叢　第 5･6 輯』愛知大学文学会
「田原町大久保遺蹟概報」『愛知大学綜合郷土研究所 所報　№6･7』
「大久保遺蹟の住居址」『愛知大学綜合郷土研究所 所報　№8･9』
「大久保遺蹟の植物種子」『愛知大学綜合郷土研究所 所報　№10･11』
1954 年　「大久保遺蹟の土器」『愛知大学綜合郷土研究所 所報　№14・15』
「大久保雁合遺蹟概報」『愛知大学綜合郷土研究所 所報　№16』
1955 年　「渥美半島の考古学的調査研究」『愛知大学綜合郷土研究所 紀要 第 2 輯』
「豊橋市野依町仏餉遺蹟発掘報告」『愛知大学 文学論叢 第 12 輯』愛知大学文学会
1957 年　「籠田遺跡」『日本考古学年報5』日本考古学協会
「豊橋市南高田遺跡発掘報告」『愛知大学綜合郷土研究所 紀要 第 3 輯』
1958 年　「一宮村炭焼平古墳発掘調査報告」『愛知大学綜合郷土研究所 紀要 第 4 輯』
1959 年　「一宮村上長山古墳発掘調査報告」『愛知大学綜合郷土研究所 紀要 第 5 輯』
1959 年　「一宮村徳台遺蹟」『愛知大学文学論叢 第 18 輯』